

# 統社同・フロント60年 思い出の人々 ⑥

## 大阪編 (4)

大森誠人

### 先鞭切つて共産党から離脱

フライングで離党？

大森誠人。山六さんらとともに共産党から離脱し、社革一統社同と歩みを進め、統社同では第2代の書記長に就任した。私たち周辺は「せいじん」と呼び習わしていたが、正しくは「まこと」と読む。

共産党8回大会を前にして「春日離党」、あるいは春日庄次郎を含む中央委員・同候補7人の離党声明が出され、共産党が除名処分を踏み切った。これが

丹羽 通晴

よく知られた8大会離党だが、実は大森さんの離党はそれに先んじていた。いわばフライングだったわけだが、その経緯を大森さん本人が山六さんの遺稿集に綴っている。



大森さんは8回大会での綱領論争に賭けていた。少数派であることはわかっていたが、決定に同意できないなら大会から退席する、それができなければ反対票を投ずる。東京の安東仁兵衛、兵庫の直原弘道とも合意をし、大阪でも気脈を通じていた同世代のメンバー数人もギリギリの議論をしていた。ところが

が、新綱領反対派の核となるべき春日庄次郎が代議員にもなれず、発言自体を封じられる可能性が高くなっていった。そこで大阪から代議員として推薦しようという提案が出され、府委員会で激論となっていた。

ところが、「感情は次第に激し、こんな会合に出ているわけにはいかない」というところまできてしまった。僕は足音も荒く退場した。さア困ったのはMA、MU、SU君である。まだほとんど発言さえしていない。このへんは、後で聞いたことなので簡略化しよう、そこはさすが長年にわたって党の常任活動家だったMA君は、再び事態をもとに戻し、議論をもういちどもりあげたのち、退場した。さらにSU君も労働運動の

ベテランにふさわしく、別の入口から議論を始め、きっかけをつかんで退場した。ところが、MU君の場合はそうはいかなかった。同君はもうすでに以前からこの党の中で議論し闘うことに意義を見出すことができず、しばらく前から会議に出席していなかった。(中略)：そこが彼のえらい所だが、簡単に『大森、MA、SU君ら、私が信用している人たちが退場した以上、私も同席できない』と述べ、悠々と退場した

「イニシャルを使ったのは、これらの人びとの現在の立場や役職を配慮したため」と大森さんは記しているが(もう配慮しなくてもいい時代だったと思うが)、それぞれ松葉武雄(当時北地区委員長、のちに市教組書記)、村田恭雄(当時は大教組の専従か?)、のちに統社同初代書記長)、鈴木美雅(当時は市職細胞キャップ、のちに市職委員

長)の各氏である。なお、この文章は山六さんへの追悼文なのだが、それについては「実は僕が山六なる人物を見直した(えらそうにいうが)のも、この時である。それまで何かさとしたようなことを時にいう『オッサン』ではあるが、本当に問題がわかっているのかどうか首をかしげたくなるような人物であった。しかし、この時、たしかに僕らには同調しなかったが、議論がはずれてくるたびに、問題の焦点が、春日氏の代議員権にあると引き戻してくれた」とまとめている。

このように唐突な大森さんたちの行動だったが、これを契機に中央委員・同候補7人が離党声明を公表し、さらに離党者が続出することになる。

大学を中退して  
関西・大阪へ

あらためて大森さんの政治人

生を振り返ってみる。ベースとなるのは『大森誠人・大森英子遺稿・追悼集「滄海の波紋」』(刊行委員会、97年刊)。ご夫婦並んでの遺稿集で、364ページの大作だ。なお、これ以降の叙述は、とくに断らないかぎりこの書物からである。

おふたりは幼馴染であり、実は東京の下町生まれ。1928年11月10日、英子さん出生。翌29年3月8日、誠人さん出生。ともに月島第二尋常小学校を卒業した。敗戦直後の46年、誠人さんは東京商大(現・一橋大学)に入学。51年、大学を中退して共産党国際派オルグとして関西に派遣される。英子さんもすぐあとを追って関西に。同棲、事実上の結婚。

少年時代については唯一、誠人さんの実兄・拓二さんが書いてある。小学校時代、誠人さんはよく勉強し、成績はクラスか学年全体でも常に一番だった。

遊びもよくした。英子さんはよく目立つ才女で、1学年上の拓二さんもその名は知っていた。商大時代は社会主義革命とマル・エンにこり固まっていた。戦中の抑圧の反動で、戦後すぐの青年会運動に二人とも熱中した。「誠人と英子は『色つき』の方向へ進む中で、ピンクの色もついていたらしい」。53年8月、京都総評オルグに就職。英子さんは婦人民主クラブの活動をはじめ。56年、全金京滋地本書記に転職。57年、共産党北大阪地区委員(常任)、58年、共産党大阪府委員になる。

ここであらためて50年以降の共産党の経緯を振り返ってみる。50年1月、コミンフォルムが日本共産党(野坂)を批判。ここで共産党は主流派(所感派とも呼ばれた)と国際派に公然と分裂。合わせてレッド・パージの嵐が吹き荒れる。誠人さんは発行停止となった「アカハタ」

の後継紙を東京から大阪に運ぶが逮捕され、それを契機に関西に居着くことになる。55年7月、共産党六全協。ここで一応は党の統一と団結が回復したとされるが、ここまで公然と対立していたら、そう簡単に修復とはならないだろう。

しかし、北大阪地区委員会（現・北区、淀川区、東淀川区を管轄）は主流派（松葉武雄、大西甚五郎）が掌握し、そこへ国際派（原全五、小西節治）が加わるが、均衡がとれた構成であつたらしい。電通、全通、市役所、国鉄、教組、新聞などが強力な細胞を維持し、大衆運動でも力を発揮していた。京都時代の大森さんは赤色労働組合主義に没頭していたが、国際共産主義運動の変貌を目の当たりにして変貌していく。そこへ北大阪地区の常任の話は渡りに船だつたようだ。職場労働者との接触、労働運動に直に関わる道

が開かれていく。大森さんにとって最も生き生きしていた時期だつたかもしれない。

55年の六全協を経て、58年7月には7回大会。これについては、安東仁兵衛さんが『戦後日本共産党私記』（文春文庫、95年刊）に詳述されている。しかも、大森さんが大学ノートに61ページにわたって記録したメモをもとにした記述である。このときもまだ党中央はかなり自信喪失していた模様で、批判されては紛糾し、甲論乙駁が繰り返され、「荒れた大会」であつたようだ。予備日2日、本大会9日におよんだが、綱領（党章草案）の採決は延期となつた。ある意味ではじめての「自由な雰囲気」の大会だつたかもしれない。ところが、その後の党運営に自信をつけた中央は、続く8回大会では徹頭徹尾反対派を隅に追いやり、発言させないという手段に打つて出た。大森さんの

退席騒動もその脈略にあつた。統社同で何をめざしたのか

社会革新運動について、関西メンバーの多くが違和感を抱いていた。いかにして前衛党をつくるのか、に対して、どのようにして大衆運動をつくっていくか。関西ではそういう見方をしていたようだ。だから関西のメンバーは全国委員にはならなかつた。大森さん（あるいは安東さん）たちの構造改革論については、社革の中でも「あれは修正主義ではないか」という評価もあつたようだ。だから、統社同は結成された。62年5月の結成大会では、大森さんは経過報告を務めた。

その後の数年間の統社同の内部分論争は「政策提起集団」をめぐるものだつた。安東さんは、社会党に二重加盟して、そこで政策提起することに統社同を位置づけた。しかし、関西では学生運動、平和運動、大阪の労働

運動という独時の運動展開があり、そこに意味を見出し出していた。社会党を含む日本の社会主義運動の前進に寄与しようという考え方だろう。だから統社同の独自性の堅持は必要だということになる。

ただし、関西と東京、あるいは各地方でそれぞれの事情があつた。関西でも、大阪と京都、兵庫では事情が違う。さらに、この当時のメンバーたちの立ち位置の問題もあつたのではないか。大森さんたち中心世代は30歳代になつたばかり。それぞれに組合の中軸を担うようになっていたし、一騎当千のツワモノばかりだ。60年代半ばに就職して大阪に来た小寺山さんは、兵庫では活動家の就職には非常に苦勞させられた。そして、大阪では労働者支部がないことに愕然とする。神戸組だけで労働者の支部を結成した、という。運動はうまく回っている

し、各メンバーもその中軸で奮闘している。しかし、組織らしい組織をつくつていこうという方向にはならなかつた、あるいはつくろうとしたがうまくいかなかつたのか。会議らしい会議もあまりなかつたようだ。京都では共産党離党の中心は榎並公雄さんだつた。ところが、中岡哲郎さんによれば、その榎並さんが「戦術的に社会党に入るのではなく、社会党そのものになりきつた。…（中略）…だから私が方針案を提起するはめになつた」。

64年5月、3回大会で書記長になる大森さんだが、組織力以上の陣容を誇つた専従体制も限界にきていた。66年には大森さんも自治労府本部の書記に就職する。自治労に入るにあたっては「大森みたいな大物は困る」といった声もあつたようだが、鈴木美雅さんが押し通す。このときの大森さんについては、府

職労の共産党対策、さらには協会派対策もあつたらしい。68年には市労連に転籍。69年の統社同分解に際して、大森さんは小寺山さんともに離脱して同じ道を歩む。71年には大阪市政調査会の担当書記になる。そして、自治労に所属するなかで、構造改革派として独自の自治体改革論にも健筆を奮っていた。

### 脳腫瘍を発症して5回の手術

「もう一度労働運動からやっていく」という決意を、それぞれ時代の多くの知人たちは聞いていた。統社同でも労働部長を務め、労働運動方針もほとんど大森さんが執筆していたという。大森さんの著作には『労働組合とはなにか』（三一新書、65年刊）、『労働組合入門』（合同新書、68年刊）、『反体制労働運動とは何か』（三一新書、70年刊、共著）、「労働運動を現代に問

う」（現代の理論社、77年刊）がある。だから、統社同書記長という党務者の立場は、本人には不本意だつた気がする。

後年、自治労に所属したこともあつたか、選挙とくに首長選挙では主導的立場で関わつた。では選挙が好きだつたかという問いに「本人は、選挙はクライヤ

いつてましたよ」とは市政調査会で大森さんとともに仕事をしていた中畑英司さんの弁。75年の大阪府知事選挙（共産VS社公民VS自民）について、小寺山さんが大学の先輩だつた松本剛弁護士（追悼集にあるエピソード）を書いている。警察から文書違反で責任者は出頭せよとの命令が来て、小寺山さんが出向く。事前の打ち合わせが必要だといつても、そんな時間はない。ただし、黙秘は困るという支離滅裂なシナリオを演じるとのこと。このときの弁護士が松本剛さんで、ふたりして本裁判で公

職選挙法の不当性と闘う意志一致をしていたのに、そんな金がかかりで面倒なことはいないと拒否された。「護憲の党」って何なのさ、というオチは小寺山さん自身の弁。後日、たぶん酒の席で小寺山さんから「あれな、責任者は大森さんやつたんや」と聞いた。

いまさら故人を貶めるためではなく、まだ30歳代で血気に逸る小寺山さん、40歳代半ばで調整役に徹していた大森さんの対比がなんとなく愉快に思えたのだつた。ここでも本人の意向とにかにかかわらず、そのときどきの必要に応じて動かざるをえなかつた大森さんという人物の立場というか立ち位置がうかがえる。8回大会の直前に大森、安東のふたりははじめて出会い、夜を徹して語り合ったが、「彼に言わせれば、君は立業、僕は寝業、多弁と寡黙、宮本派育ちと春日派育ち、歩き方まで上向

きと下向き、すべてが対照的であるという」。

ところで、大森さんは72年に脳腫瘍の手術を受け、その後も再手術を重ねていた。にもかかわらず、89年の定年退職まで市政調査会を勤めあげることができた。そのために英子さんはわざわざ車の免許を取り、あるときは車椅子を押して大森さんをサポートしていた。94年5月16日、英子さん、脳出血で死去。翌95年6月27日、誠人さん、誤嚥性肺炎で死去。1年ほど早く英子さんが逝かざるを得ず、誠人さんが後を追って逝った事実

に、多くの人たちが「どうして……」という感慨を抱いた。英子さん亡き後も誠人さんは基本的には自宅で最期の日々を過ごされた。娘の順子さんはじめ婦民の人たちの介護の尽力あつてのことである。こういうときも男は余り役に立たないのか……。

私が大森さんとはじめて出

会つたのは、山六さんの遺稿集の座談会（79年）に出席されたとき。ひとりて杖を突いて来られたと思う。つづいては「脳腫瘍術後十周年お礼の会」（82年）。このときは英子さんが押す車椅子に乗って参加された。その少しあとに「居宅のリフォームに際して余分な書籍類を片付けた」という意向から先輩とともに自宅を訪れたのだが、膨大な戦史関係の書籍の山に驚いた記憶がある。私からすれば、好々爺然とした大森さんの印象しかないが、それも脳腫瘍の影響かもしれない。

## 『先駆』5月号を読んで

5月10日、米国のヘインズ国家情報局長は、ブーチン大統領が「長期戦に向けた準備をしている」と述べた。同じ10日、米国のミサイル巡洋艦が台湾海峡を通過した。4月26日にも米国ミサイル駆逐艦が台湾海峡を通過したばかりである。

「ロシア、アメリカにとつてのウクライナ戦争」朝日氏論文は、米国が対ロ・対中の「二正面作戦体制を急いでいる」「帝国アメリカにとつてウクライナ国家は一つの駒であり、ウクライナ戦争は覇権国家アメリカ的秩序再建の舞台回しに過ぎない」と指摘している。本当のウクライナ支援は「何よりも即時停戦・休戦実現」であり「市民を見殺しにするな。戦争を直ちにやめよ」と訴えている。

日本に居住するウクライナの人達とロシアの人達がいっしょになって「即時停戦」を訴えている。ロシア国内では、人々の

8割が侵攻を支持し2割が反対しているようだ。あの言論統制の中で、2割は小さい数字ではない。2割の切実な思いが広まるように応援したい。

言論の問題では「表現の自由由展東京2022」前山氏報告は、表現の自由を守る闘いの成果と教訓を示していた。会場に展示された反戦の旗が、今何が大切なことを教えている。

「ドーリットル空襲から80年」弘田氏報告は、太平洋戦争での日本本土最初の空襲の実相を語り継ぐ取組みを詳述している。当時の破壊された街の写真は、ウクライナの今と重なる。戦争を繰り返してはならない。

宗氏の「『新日和見主義事件』当事者として」連載が最終となった。連載では、組織内民主主義について考えさせられた。「これからの社会を考える懇談会」の継続に敬意を表したい。

(島)

# 統社同・フロント60年 思い出の人々 ⑦

## 東京(首都圏)編(1)

佐々木成

### 『君、飄々と行く』

平田 芳年

1968-70年は「学園闘争、ヘルメットとゲバ棒、ベトナム反戦、日米安保、沖縄返還、文化大革命。激動する東アジアの一環として日本の70年闘争は展開された時代」(フロント50周年特別号)であった。統社同・フロントも構造改革論からレーニン主義への回帰という急進主義に転換、機関紙題字「先駆」への変更や「日本共産主義革命党」への党名変更と激変の時代を迎える。



この過程でフロント＝学生戦

学生が集結し、そのまま大部隊となつて本郷の安田講堂前に突入。歴史的な東大闘争の始まりである。

「67年当時、東大教養学部の活動家のリクルートには、学生運動に関心を持っている学生を直接フロントにオルグする方法と勉強好きの学生を現社研に勧誘し、そこでマルクス経済学や構造改革論の勉強をしているうちに徐々にフロントになつてもらう方法があつた。前者の柱がいつも駒場の現場に張り付いていた石井さんであり、後者が佐々木さんである。この二人にオルグされてフロントに入った者は大勢いる。多くの学生がこの二人のオルグでフロントに入ったのは、こいつに付いていけば間違いないと人に思わせる何かがあつたからに他ならない」(今村俊一弁護士、追悼集) 69年1月、東大闘争は安田講堂決戦の時を迎える。当時、

線の闘いの中心にいたのが佐々木成さん。当時、「麻布」

「むさ苦しい駒場寮の一室で翌朝配るピラのガリ刷りをしてしていると学生2人が連れ立って入ってきた。『何か手伝うことはありませんか?』。仕事をしていた仲間が一瞬、あつげにとられた。『このご時世に何をそんなら、東大生が責任を持って残る必要がある。人選に配慮せよ。この指摘に「佐々木さんも内心、痛いところを衝かれたと感じたそうである。籠城者を誰にするかを判断するとき、これらの闘争のことを考えて、できれば東大の人数を少なくしたい、という考慮が彼の中に働いていたからだ。この時点で人選は済んでいたが、指摘を受けて、佐々木さんは若干名の追加を決断した」。

佐々木さんはフロントの闘争方針決定の最終責任を負つており、籠城決戦を決めていた。安東仁兵衛ら統社同幹部はこの方針に反対し、話し合ひは決裂。籠城の直前、安東仁兵衛が東大に佐々木さんを訪ね、最後の会談になった。その模様を佐々木成追悼集で安藤紀典氏が記している。

安東 何が獲得目標なのか。無意味である。中止すべきだ。

佐々木 そんなことをすればフロントは大衆的な支持を失つて運動も組織も崩壊する。仮に佐々木個人が中止に賛成しても組織から放り出されるだけである。方針は変えない。

安東 仕方がない。どうしてもと言うのなら、死者を出さないように、機動隊が入ってきたらすぐに抵抗を止めよ。

佐々木 考える。

安東 籠城者は決まっているのか。ことは東大闘争であるか

東大駒場は日共系、反日共系が勢力を二分する状況にあり、フロント派学生は急速に伸張し始めた時代でもあつた。佐々木さんは高校時代から時代の激動局面に敏感だったのだろう、東大入学直後から駒場寮のフロント派に接近、東大闘争の高揚期には学対責任者の立場で学園闘争の指導を担う。

### フロント派への接近

「むさ苦しい駒場寮の一室で翌朝配るピラのガリ刷りをしてしていると学生2人が連れ立って入ってきた。『何か手伝うことはありませんか?』。仕事をしていた仲間が一瞬、あつげにとられた。『このご時世に何をそんなら、東大生が責任を持って残る必要がある。人選に配慮せよ。この指摘に「佐々木さんも内心、痛いところを衝かれたと感じたそうである。籠城者を誰にするかを判断するとき、これらの闘争のことを考えて、できれば東大の人数を少なくしたい、という考慮が彼の中に働いていたからだ。この時点で人選は済んでいたが、指摘を受けて、佐々木さんは若干名の追加を決断した」。

### 整風運動

70年闘争の終局過程で、同盟組織は混乱と分裂の時代を迎える。同盟執行部は70年闘争方針として「安保粉砕・軍国主義粉砕・帝国主義政府打倒」を基軸に据えた反軍国主義青年共闘路線を提起、フロントの影響力と活動家層を徐々に配置し、党のもとで諸運動領域・諸戦線をつくりだし、それらの活動拠点を

なに好き好んで」という感じだった。あのころはたいがい、無理矢理オルグされて仕方なしにやらざるを得ないというふうなかたちで運動に関わるケースが多かったから、自ら名乗り出て仕事を買って出るなどということは珍しく、奇特なことだった(上間常道氏、佐々木成追悼集)。その一人が佐々木さんだ。

68年6月、東大教養学部自治会正副委員長選挙が行われ、それまで自治会執行部を握っていた民青候補を破つてフロント派候補の正副委員長が当選、フロントが教養学部自治会を担うことになる。その選挙戦の直後、医学部全闘委が占拠していた安田講堂に機動隊が導入され、それに抗議する第一本館裏の銀杏並木集会に1000名を超える

生み出そうとする構想だった。しかしここで現実とぶつかった。東京都委員会下での部落差別発言と三里塚現闘団の女性差別事件が発生、フロント派は差別者集団であるとの厳しい内部糾弾が始まった。この差別事件の渦中、72年3月、第8回中央委員会総会(8CC)が召集され、「政治局員並びに全中央委員の自己批判一相互批判、黨員・同盟員を共産主義者として改造し、真の革命的前衛を建設する」ことを決議、「8中総整風運動」が発動される。

「学生運動の指導層は中途半端で徹底しないインテリゲンチヤ的な体質があり、同盟内で発生する差別言動は、基本的に同盟内の大衆運動主義的偏向・小ブル的体質・総体としての統社同的残滓に根拠をもっている」とし、佐々木さんから3名の政治局員が解任される。しかしその後組織された新政治局

は「日本革命の主体である労働者階級の革命的翼は日本共産党にあり、新左翼運動はフロントを含め、小ブル急進派であった。フロントを解党し、共産党に合流すべきである」との解党派に転換、自壊・遁走する。フロント中央がなくなり、『先駆』発行も停止する。ここからの再建過程で佐々木成さんの本領が発揮される。

「共産主義と労働運動の結合」、新しい同盟路線を巡って、同盟内の厳しい論争が続ぎ、佐々木さんは少数派の論客としてカミソリのような切れ味で論陣を張った。このため、大会で中央委員としてただ一人、信任を受け、再任されない時もあった。「この時期を前後して佐々木は論陣を張る姿勢（厳しい論理）よりも話を聞く姿勢（柔軟性を持った強さ）に変化したのではないかと私は思っている」（朝日健太郎、追悼集）。

80年代、労対責任者だった佐々木さんは「会社主義をひっくり返せば、社会主義だ」を口癖に、機関誌『団結』に「合理化反対闘争の基本問題」や「労働運動のこれからの課題」などの重要論文を執筆、労働運動の最前線で戦い続けた。江戸川区の下請け清掃会社・水穂興業の労働争議、大田区に加藤製作所解雇撤回闘争、全金本山闘争、練馬区の成増病院闘争など闘争現場に出向き、当該労組員や地域の活動家と交流、酒を酌み交わしながら、たちまち溶け込む才能を身につけていった。

その傍ら、フロントが立ち上げた「労働者学習協会」（代表・倉野精三日本女子大教授）の實務も背負い、毎年発行する「春闘パンフ」の執筆・編集に尽力、時折、開講する労働講座の講師も引き受けるなどの活動に注力。1985年には柴山健太郎さんから労働者党系の人たちが主

権する労働運動研究所の理事に就任、共同研究活動を本格化させるとともに、月刊雑誌『労働運動研究』の編集に参加するなど、理論面での貢献も忘れがたい。

### 専従から サラリーマンへ

専従は1991年。先駆社専従から離脱し、日本能率協会総合研究所研究員としてのサラリーマン生活に移行する。仕事は同協会が受注した経済、産業、労働関係の委託研究の調査・報告がメイン。企業が立地する各地に赴き、実態調査を基に分析、提言するのが主な業務内容だ。ここでもフロントでの活動が生かされ、主任研究員に昇格、委託研究のとりまとめを任されるまでになる。

一方で、研究員活動続けながらも先駆社の動向をいつも気にかけていたようだ。時折、先駆

社に電話が入り、佐々木さんの専従離脱の後受けて事務局を担当することになった私が呼び出された。東京・港区芝公園の脇にある日本能率協会ビルに向き、談話室で1時間ほどレクチャーする。「あの党派はどうなった」から始まって、「政治連合はうまくいっているのか」、

「〇〇は事務所に顔を見せるのか」など同盟員の消息に至るまで、話題が途切れることなく、話が続いた。

しかし、90年代末の日本経済の低迷の影響で、能率協会の仕事も激減、仙台のアサヒ測量に転職。2003年に食道ガンが判明し、抗ガン剤治療。04年7月10日亡くなる。後日発行された追悼集のタイトルは『君、飄々と行く』。多くの人がその立ち居振る舞いをそう形容していた。遺骨は東京谷中にある佐々木家の菩提寺・南泉寺に納められている。享年58歳。

東京(首都圏)編(2)

安藤 紀典

前野良(上)

反核運動から

ポーランド「連帯」まで

構造改革派の政治学者

1950年代末から60年代にかけて構造改革論が華々しく登場したとき、その理論家は経済学系が多く、政治学系は前野良と勝部元の二人だけだった。ともに統一社会主義同盟に参加したが、最後までフロントと付き合ってくれたのは前野一人で、特に同盟分裂の発端となった68年代末の大学闘争(全共闘)をめぐって、前野はその意義を高

く評価してくれて、のちに自身の長野大学における解雇撤回闘争では、「今、僕も君たちと同じように闘っているんだよ」とわざわざ私に告げるくらいであった。

前野良は1913年、金沢市に生まれた。先祖は中津藩医の前野良沢(杉田玄白らと共に、医学解剖書を翻訳して『解体新書』を著した)だという噂だった。私が「本当ですか」と尋ねると、彼は苦笑して何も答えなかったが、否定しなかったところを見ると、多分本当だったのだろう。

九州大学法文学部政治専攻に

ソ連核実験再開をめぐって原水協が分裂し(統社同に結集した人々はもともと早く「いかなる国の核実験にも反対」を打ち出した)、総評・社会党系の原水協禁止日本国民会議(原水禁)が発足した時には代表委員の一人を務めた。

この分野における前野の活動は、日本の原水禁運動にとどまらず、常に世界的規模の反核平和運動に目を向けていた点に特徴がある。特に1980年4月のEND(ヨーロッパ核廃絶運動)の「宣言」が出されて以降の世界の反核平和運動の質的転換の意義を明らかにした功績は大きい。ENDの「宣言」は全ヨーロッパの非核化とともに、東西の対立からヨーロッパを解放することを求め、これを契機に東欧の自主的平和運動と西欧の反核平和運動との対話・討論が始まった。さらに80年5月のハワイにおける「非核・独立の

入学、政治学の今中次磨に師事した。今中は吉野作造に教えを受けた学究で、リベラルな立場から満州事変(1931年)以後の政府の戦争拡大方針を批判し続け、42年に九大教授を辞任した。前野は九大を卒業後、東亜研究所(企画院の外郭団体として設立された国策調査機関)に勤めたが、44年に一兵卒として召集され、45年に広島で被爆者救援に従事して自らも被爆した。

敗戦後は復帰した今中次磨から九大に誘われたが、理論と実践の統一が大事とばかり、共産党本部の調査部長となった。石堂清倫『わが異端の昭和史』(勁草書房、のちに平凡社ライブラリー)によると、本部内にはマルクス・レーニン主義研究所が

した諸問題について、原文資料の翻訳を日本の読者に届けるとともに、自らも理論的に深く分析したことである。

同大会はスターリンの誤りを暴露した「フルシチョフ秘密報告」が有名だが、もともとの課題はソ連社会主義の経済改革、戦争回避と平和共存の可能性、

社会主義への道の多様性の承認、などの提起で、共産主義運動の世界史的転換の始まりを告げるものであった。それだけでも大変な理論的課題で前野もその解明に努力したが、その直後にハンガリーで大規模な民衆蜂起とこれに対するソ連の軍事介入という大事件が起こり(56年10月)、それをどうとらえるかが急務であった。

「1956年は、国際社会主義運動とマルクス主義思想にとつてはきびしい反省とあたらしい前進の年であった。とくにハンガリー事件は、国際共産主

あつて、「日常政策について参考資料を作成する調査部と区別して、より長期的な展望をもつ基本的研究に従事する機関であった」。前野もその一員として参加した。

それから2007年5月18日に94歳で亡くなるまでの約60年間、前野は反核平和運動や社会主義改革の世界的潮流について、理論分析で時代の先頭を走り続けた。年代の順序を追った略歴は(下)にまわして、まずは問題分野ごとに彼の業績を大まかにまとめてみよう。

世界の反核平和運動

第一の分野は反核平和運動である。前野は自らの被爆体験を原点に、原水禁禁止日本協議会(原水協)に参加。1961年の

義運動史上にいまだかつてなかった複雑な経験であり、事件を構成した諸条件の冷静な分析にもとづいた教訓がもたられた」。このような「まえがき」のもとに、前野の編集で『ハンガリー問題——それをめぐる論争』(57年5月、合同出版)を出版した。

その後、前野の発案で「社会主義政治経済研究所」が創設され、同所の編集によつて国際共産主義運動の諸文献が合同出版から続々と発刊された。世界史の現段階の特徴と検討課題について、指導的共産主義者たちの論文を集めた『戦争と平和の諸問題——現代帝国主義の再評価』(60年)。60年秋に開かれた各国共産党の世界会議の「81カ国声明」とそれに対する各党の評価をまとめた『現代革命の基本問題』(61年)、そして次第に明らかになったソ連と中国の両共産党間の論争に関する『中ソ

論争 平和共存・戦争・革命の理論』(1963年2月)、『続中ソ論争 歴史的背景と原因への理論的分析』(1963年8月)などである。

こうした中で日本の構造改革派は生まれた。私たちの先輩はスターリン批判を単にソ連の出来事としてではなく、日本の共産主義運動に長年込みついていたスターリン主義の残滓をどう克服するかという問題として主体的に受け止めた。ソ連共産党書記長のフルシチョフ路線をおおむね支持しながら、それをさらに深化・発展させたイタリヤ共産党の「社会主義へのイタリヤの道」の提起に強い関心を寄せた。

イタリヤ共産党はトリアッティ書記長のもと、国際的には平和共存の可能性を積極的に追求し、国内的には民主主義を根本的に改革し、反独占の国民的多数派を形成しながら社会主義

に接近する「構造改革論」を唱じていた。日本の構造改革派はこれから多くの示唆を受けた。

### チェコとポーランド

第三の分野は、第二の延長線上にあったとも言えるが、「ブラハの春」と呼ばれた68年のチェコにおける民主化・自由化とソ連の武力占拠によるその挫折から、80年代のポーランド「連帯」の自立・民主化運動にいたる東欧社会主義の改革運動に終始寄り添ったことである。

チェコの民主化・自由化については、「チェコ革命の歴史的意義」(『現代の理論』68年10月)、「チェコ革命とは何か」(同68年12月)が、私の印象に強く残っている。ここで前野は、チェコの民主化・自由化はもちろん国内におけるスターリン体制の否定と転換を意味したわけだけでも、それにとどまらず、同じ

時期に全世界的規模で、スチューデント・パワーや既成左翼批判を内包した西欧の新しい労働者階級の運動、そしてアメリカにおけるブラック・パワーという「新しい社会的主体」が登場してきたこと、すなわち東西を通じて「ひとつの世代的な歴史の転換の特徴があらわれ」たことに注目し、それは「現代社会主義形成のひとつの序曲的性格をもっている」と強調したのである。大学闘争の渦中にあった私などはこの提起に深く納得し、前野への信頼がますます増したことを覚えている。

社会主義の転換に果たしたポーランド「連帯」の意義、およびその主な指導者との対話については、『東欧をゆるがす民衆の哲学——ペレストロイカとポーランド「連帯」(オリジン出版センター、1990年)にまとめられているが、その「はじめに」で前野は次のように述べている。

報』を発行し続けた。

### 第四に前野自身の社会主義論

としては、テクノロジが高度に発展した社会における「労働者の自主管理」論の重要性を強調した。一連の論文は『自主管理の政治学』(緑風出版、1983年)にまとめられている。

当時、西欧とくにフランスでは自主管理社会主義論が発展しており、イタリヤでは住民自治と地域評議会の運動が進んでいた。ポーランド「連帯」も体制から「自立」した労働組合の建設が基本性格であったから、洋の東西を通じて「自主管理」がキーワードであると前野はとらえたわけである。

この「自主管理」論について、フロントの中では神奈川のリーダーだった大熊直人がもつとも熱烈な支持者で、「どうして前野さんをもっと活用しないのか」と私などに度々文句をつけたのだった。

べている。

「今日のソ連・東欧の大変動、それも東欧ではソ連よりも急速な旧体制の崩壊、それを知らされることに私にはとくに二つのことが思いおこされた。ひとつは、一昨年(88年)の6月、ポーランド「連帯」運動の理論的指導者とワルシャワ、グダニスクで行った対話であり、もうひとつは、(略)チェコの『人間の顔をした社会主義』の試みを戦車でじゅうりんしたソ連に対して、友人とともに大使館に抗議にかけた時のむなしさである」

「ブラハの春」の挫折は、社会主義の体制内(共産党の内部)からの改革、自由主義的改革の方法に幻滅を抱かせた事件であった。ポーランド「連帯」運動は、これらの上からの自由主義的改革路線を批判的に総括し、体制の外(からの)不断の異議申し立てとオルタナティブ

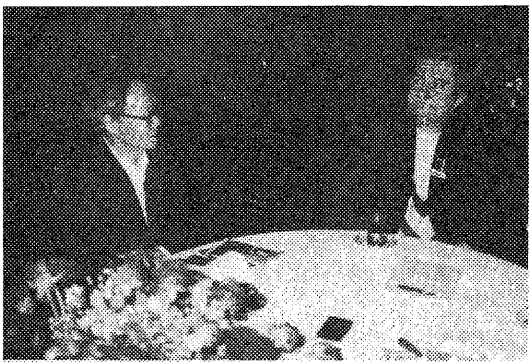
て出版された(1964年)。

### 東京グラムシ研究会

第五にグラムシ研究である。第二次大戦前のイタリヤ共産党のリーダーであったアントニオ・グラムシが獄中で書き続けた膨大な「ノート」が戦後に公開され、日本でも翻訳・紹介が待たれていた。ようやく60年代はじめに『グラムシ選集』3巻が合同出版から刊行された(のちに3巻を補足して全6巻になった)。これとともにグラムシ研究が始まった。

石堂清倫の前掲書によると、「獄中ノート」のうち政治理論に関するものを中心に、月例の『現代の君主』輪読会が持たれて2年ほど続いた。熱心な出席者は藻谷小一郎、前野良、中村丈夫、上村忠男、辻雄一、上杉聡彦その他であった。これが東京グラムシ会の始まりで、その研究成果は石堂・前野編集による青木文庫版『現代の君主』とし

て出版された(1964年)。「文庫本は前野と私(石堂)の名義になっているが、これは代表としてであり、印税は中村、上村、上杉、私、前野とのあいだで分配した。一種のロングラーゼラーで、よく売れた」参加者を簡単に紹介すると、藻谷小一郎は「組織問題研究会」を組織して、社会党内構造改革派の一角を占めていた。中村丈夫は「社会主義労働者同盟」のリーダーで、67年ごろ、構造改革4派といわれた統社同・社労同・共産主義労働者党・統一共産同盟の間で組織合同の話があった。詳しい情報が公開されなかったもので、私などはよく分からなかったが、のちに社労同の関係者が明かしたところによると、中村丈夫はこの合同話から離脱し、新左翼諸派との共闘路線に踏み切ったそうである。これが新左翼八派連合のきっかけとなった。(続く)



ワレサ委員長(右)にインタビュー

# 統社同・フロント60年 思い出の人々⑨

## 東京(首都圏)編(3)

安藤 紀典

前野良(下)

ハンガリー・

チエコ・ポーランド

二人のグラムシ研究者

「東京グラムシ研究会」の統  
き。メンバーの一人、上村忠男  
は東大の学生で、中村丈夫にイ  
タリア語の教えを受け、輪読会  
に参加した。社会主義学生戦線  
(フロント)を経て、統社同に加  
盟したが、「数ある党派のなか  
でもフロントという党派は教条  
主義の呪縛からもっとも自由  
で、新しい政治文化の動向を  
もっとも機敏に察知した党派で

あった」と評価した  
のが理由であった  
(上村『回想の196  
0年代』ぶねうま舎  
2015年)。

その後上村はグラムシに導か  
れてイタリア史の研究へ向かう  
が、やがてイタリア共産党トリ  
アッティ路線に疑念を持ち始  
め、ヴィーコという思想家の研  
究に専念するようになり、この  
分野の第一人者となる。グラム  
シ『現代の君主』について言え  
ば、2008年にその「新編」  
を上村単独で編訳し、ちくま学  
芸文庫から出版した。

ついでに触れると、統社同に  
はもう一人、藤沢道郎という著

名なグラムシ研究者がいた。彼  
は合同出版社『グラムシ選集』  
の続巻、第4巻から6巻までを  
単独で編集した俊英である。京  
都大学の出身で、同窓の中岡哲  
郎や飛鳥井雅道と親しかったこ  
とから統社同に参加し、196  
4年に復刊した『現代の理論』  
(第二次)にもよく寄稿してい  
た。「グラムシの思想」を連載し  
て愛読したことを私は覚えてい  
る。のちに桃山学院大学の教員  
になったが、関西の同志たちは  
記憶しているだろうか。

### 共産党本部の調査部員

前号で予告したとおり、前野  
良の「略歴」で大事な時期を補っ  
ておこう。

敗戦後、前野は日本共産党本  
部の調査部員になり、党内のマ  
れた。

批判に「原則と見て、全体とし  
て日本資本主義の発展の可能性  
を否定した態度は、「科学以前  
の教条主義というほかはなく、  
諸方面から嘲笑された。(略)執  
筆者たちは一日も早く忘却され  
ることをひそかに祈ったであろ  
う」という。したがって、前野  
の古傷を暴くつもりはないの  
で、内容は紹介しない。

### ハンガリー事件

日本の共産主義運動の歴史の  
なかで、前野が大事な仕事を始  
めたのは、1956年のハンガ  
リー事件の研究からである。こ  
れに関する仕事は二つある。日  
本共産党中央委員会宣伝教育部  
編『ハンガリー問題と共産主義』  
(新日本出版社、1957年1  
月)、前野良編『ハンガリー問題  
それをめぐる論争』(合同出版  
社、1957年5月)である。  
当時、党本部の宣伝教育部に  
所属していた増山太助の『戦後

期左翼人士群像』(つげ書房新  
社、2000年)によれば、事  
件が勃発すると機関紙『アカハ  
タ』や宣伝教育部に「党の見解  
を求める」投書が殺到した。こ  
れに対して、六全協後に主導権  
を確立しつつあった宮本顕治は  
ハンガリーの民衆蜂起を「反革  
命」と断じ、二度にわたるソ連  
軍の介入も強く支持した。

増山たちは、「大衆の正しい  
要求を取り上げて正しい方向に  
導くことができなかつた党に責  
任がある」と、「スターリン的な  
党の指導性」に強い疑問を投げ  
かけていた。増山たちはパンフ  
レットを発行しようと企画し、  
部長の蔵原惟人(兼任)に許可  
を求めて承認された。詳しい経  
過は省略するが、『アカハタ』編  
集局次長の内野壮児が、『アカ  
ハタ』に関連記事を署名入りで  
発表していた武井昭夫と打ち合  
わせて原案を執筆し、「取り扱  
いは君にまかせる」と渡してく

れた。

増山は「内野や武井が幹部会  
からにらまれないように工夫し  
なければならぬ」と思い、「彼  
ららしい表現や硬い述語を書き  
改め、前野からもらったコメン  
トを挿入し、活用して合作の匂  
いを濃厚なものにした」。こう  
して『ハンガリー問題と共産主  
義』というパンフレットが出来  
上がった。「たちまち売り切れ  
たにもかかわらず、増刷は認めら  
れなかった」。宮本顕治の逆鱗  
に触れたからである。

ハンガリー事件をめぐる日本  
の政治思想状況に関する研究は  
きわめて少なく、小島亮『ハン  
ガリー事件と日本』(中公新書、  
1987年)が唯一だと言って  
もよい。1956年生まれの小  
島に当時の記憶があるはずもな  
く、たくさん当事者に直接取  
材して書き上げたが、そのなか  
には増山や前野も含まれてい  
る。「この問題にたいして払っ

ルクス・レーニン主義研究所に  
も参加した。この時期の研究業  
績の一つは、岩波書店が企画し  
た『日本資本主義講座』(全8巻、  
1952-53年)の編集委員に  
なり(全部で20人)、二つの論文  
を執筆したことである。第1巻  
『日本帝国主義の崩壊』の「民  
主化」政策の意義と内容(守屋  
典郎と共同)、第8巻『軍国主義  
の復活』の「天皇制と帝国主義  
の復活」(井上清ほか3人と共  
同)がそれである。

戦前に同じ岩波書店から発刊  
された『日本資本主義発達史講  
座』(講座派)と命名される元  
になった)がそれなりに成功し  
たのにならって、戦後版を企画  
したのだが(副題は「戦後日本  
の経済と政治」、石堂清倫によ  
れば、「スターリンの言説を無

た努力において、彼ら共産党内  
反対派こそ、もっとも大きくか  
つ良心的なもの一つだったと  
思われる」と小島は評価してい  
る。

関連する国際文献を集めて前  
野が編集した『ハンガリー事件』  
は、これを通じて明らかにしな  
ければならない「次の理論的課  
題」の方向(「まえがき」)を示  
し、人々に考える手掛かりを与  
えた点で大きな貢献であった。

### 社会主義政経研究所

1958年8月ごろ、前野は  
新しい研究所を作って、ソ連共  
産党第20回大会以後の世界史が  
提起している課題と日本の社会  
主義化の道を探り出す研究をし  
たいと、歴史学者の渡部義通に  
相談した。渡部の『思想と学問  
の自伝』(ヒアリング・グループ  
編、河出書房新社、1964年)  
によると、理論面は井汲卓一、  
財政面は社会党の松本七郎に相



談して準備し、「社会主義政治経済研究所」を設立した。

所長に小林良正、理事に大内兵衛・有沢広巳・今中次磨・上原専祿という豪華な顔ぶれが揃い、研究には主査を設けて各部門の研究主任と評議員を兼ねてもらった。主査は国際Ⅱ都留重人、政治Ⅱ前野、経済Ⅱ井波、財政Ⅱ鈴木武雄、金融Ⅱ渡辺佐平、労働Ⅱ大河内一男、農業Ⅱ近藤康男という一流の学者が参加した。事務所は東京の中央線水道橋駅近くのビルに置いた（1階は喫茶店）。

松本七郎について一言。彼はのちに60年安保国会で社会党「安保7人衆」のリーダー格として活躍したが、九州の「松本財閥」の御曹司であったから、財政面を仕切ることができた。面白いことに、60年代初頭に神戸大学で構造改革派として活動した山森大七郎が彼の議員秘書になった。主が「七郎」なのにそ

の秘書が「大七郎」というので、かなり話題になった。

社会主義経済研究所は研究成果を毎月『研究資料』として発表していたが、研究所の編集で国際共産主義運動に関する多数の国際文献を発刊したことは前号で述べた。

### 60年安保闘争

1959年春から始まった「60年安保闘争」の中で、前野良は各地の学習会に招かれることが多くなった。次の記録はその一例である。

東京地評を核とする東京共闘会議は安保改定阻止行動（集会とデモ）の動員部隊の中心で、また全学連主流派を安保国民会議から排除しよう主張した共産党に反対して、「左派共闘」を追求したことで知られる。東京地評書記で安保国民会議の事務局を担った竹内基浩は、共産党員であったが党中央の指導に抵

抗して、あくまで「左派共闘」を守り抜いた。その彼が「60年安保」を労働者はいかに闘ったか——全学連と共闘した東京地評の舞台裏」という記録を遺している（社会評論社、2010年）。

「安保国民会議が闘争の戦略をめぐる意見対立によって立ち往生している状況のなかで、東京共闘会議は、第三次統一行動以降の闘争の進めかたについて意志統一をはかるために、（1959年）7月16、17日に箱根で討論集会を開いた。」「この討論集会は誰が名付けたか知らないが、『箱根左派』の集会と呼ばれ、その後の闘争に大きな影響を与えた。この討論集会の講師は前野良氏が招かれ、討論に理論的な筋道をつけてくれた。この（討論）集約はその後の東京共闘会議の闘争の戦略となった」

### 東欧へのまなざし

「プラハの春」と呼ばれた、1968年のチェコの民主化・自由化とその挫折からポーランド「連帯」にいたる、東欧社会主義の改革について前野がどう見ていたかは（上）で述べた。もちろん、ソ連でゴルバチョフが主導した「ペレストロイカ」に前野が無関心であるはずはなく、『東欧をゆるがす民衆の哲学』の第1部は「ペレストロイカと『連帯』」と題されていた。とはい

え、前野の長年の研究領域はやはり東欧社会主義だと言つてよい。その出発点は「ハンガリー事件」の編集だったが、その翌年の1958年に編集した『現代革命と人民民主主義』（大月書店）も忘れてはならない。

当時、ソ連とは違った形態で社会主義の道歩んでいた諸国を「人民民主主義国」と称するのが一般的であった。同書に運動に及んで、近頃の学生運動の一部が形ばかりを模倣して、実質のないバリケードを築いたりしていたので、私が「全共闘運動はやはり一回限りのことだったのではないか」と言ったら、前野に激しく怒られた。「君がそんなことを言つては困る。僕も今、君たちのように闘っているんだよ。」「あとがき」には書いていないが、この時、前野と中村は全国一般の支部を作つて、労働組合としても当局の責任を追及していたのだった。83年3月、地裁で解雇撤回など二人の主張の大筋がほぼ認められ、解決をみるにいたった。

### 大学解雇撤回闘争

『自主管理の政治学』の「あとがき」（1983年6月執筆）によると、この間に前野は長野大学に奉職（66年、「本州大学」として長野県上田市に開学、74年に改称）、自主管理論、グラムシの政治理論、さらに別の事情から恩師「今中次磨博士の政治学」をテーマにして研究を続けていた。

79年7月、大学当局により解雇という不当な処置を受け、同じ処置を受けた同僚の中村丈夫とともに上田地裁に訴えた。学生有志の6人が構内で1週間、抗議のハンストを決行。また元富山大学教授の内田譲吉、元法政大学教授の倉橋文雄が中心になって、全国の研究者が支援の声明を出した。

その頃、前号で触れた『先駆』の連載のことで前野に会った。たまたま話が68、69年の全共闘

は、ポーランド・チェコスロバキア・ブルガリア・中国などにおける「人民民主主義革命の成立と発展」に関する文献が翻訳されていた。その中でもっとも重要なことは、東欧諸国では当初は共産党の独裁ではなく、社会民主主義などの労働者政党や農民政党との統一戦線による政府だったということである。中国でも同様で、呉黎平「中国における多数政党長期共存の理論」が収録されていた。したがって、前野の解説も「序説 人民民主主義と統一戦線」と題されていた。

その後、「プラハの春」やポーランド「連帯」まで、東欧社会主義の改革の動きに注ぐ前野のまなざしはこの時点から一貫しているもので、古くからの共産主義者のなかでも特異な存在であったと私は思う。

私があえてこのように言うのには少しわけがある。たとえ

ば、チェコの民主化・自由化に對してソ連が軍事介入したとき、これを「社会主義共同体の利益を守るためには仕方がない」と支持した共産主義者は少なくかつた。作家の中野重治もその一人で、金沢四校から東京帝大の「新人会」以来の親友である石堂清倫を嘆かせたものだ。

もっと身近な存在では「現状分析研究会」を主宰した津田道夫で、彼は構造改革論を「修正主義」と批判し続け、飛鳥井雅道などがそれに反論するというような関係だったが、その彼はやはりソ連介入を支持した。私は津田と個人的に親しかつたが、後年「あれはまずかつた」とつぶやいていたのを覚えている。

そういう例を見るにつけ、前野の先見性に敬意を払わずにはいられない。

# 統社同・フロント60年 思い出の人々 ⑩

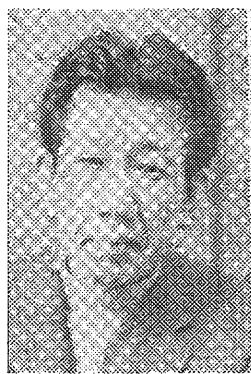
## 東京(首都圏)編 (4)

鈴木 千里

### 倉野精三

#### 自宅が「私塾」に

昨年末、先駆編集部から連載企画「統社同・フロント60年 思い出の人々」で、倉野精三氏(日本女子大教授)を紹介したいのだが……と相談があった。倉野さんは富美子夫人と共に、私たち夫婦の「保証人」であり無碍に断るわけにはいかない。だがよくよく考えてみると、私は



大衆運動や様々な政治課題と日々格闘していた二十歳ソコソコの若僧(当時の私)には、政治状況に抗うことだけしか興味がなかった。私にとって倉野さんが、どのような政治グループに所属しているのか? またその理論的背景についてはさほど関心を持ってなかった。そんな私

が倉野さんと同盟との関係を書くには無理がある。1970年代の近郊都市で出会った倉野精三、富美子さんの私的な思い出を書かせていただくことで、お二人のご供養になればと思いきや筆を執らせていただいた。

#### 「柏・現代を考える会」の活動

倉野さんは同盟との関係でいうならば、「労働者学習協会代表」と紹介すれば通りがいかかもしれない。フロントが懸命に「労働者」仲間の拡大を目指した頃、ブックレット作成や、各種会合の講師としてお世話になった仲間も多かったのではないだろうか。

70年安保が激化する中で、私とフロントを結びつけたのは倉

野精三さん、富美子さんご夫婦だった。今年の『先駆』1月号に片岡久明さんが紹介されていたが、片岡氏は千葉県松戸市で活動されており、三里塚闘争など地域で黙々と運動に取り組み個性的な「商店主」だった。倉野さんと私は松戸に隣接する柏市に居住し、倉野さんは日本女子大経済学部で教鞭をとる傍ら、地域で「柏・現代を考える会」という市民運動の発起人として「活動」(ウツ)されていた。

私は駆け出しの貧乏フリーカメラマン。政治的経験も組織活動も皆無だったが、いつの間にか「柏へ平連」「柏反戦青年委員会」(後の東葛反戦青年委員会)の先頭に押し出されていた。

「柏・現代を考える会」は、68年暮れに「学徒出陣二十五周年」

を記念する集まりがきっかけで誕生した「元祖」市民運動と言える。私の父・鈴木均(ジャーナリスト、わだつみの会理事)や倉野精三さんを中心に様々な分野の研究者、三ツ松要氏(社会党千葉県議員)ら地域在住の知識人と若者たちが混然一体となり、組合活動家(教員・労・全通・民間・自治労)・大学生・浪人生・高校生・商店主と多様な階層の市民が会員となって「投げる」というミニコミ誌を発行。月数回の例会は、激動の時代を反映して様々なテーマを議論する場となった。ベ平連や反戦青年委員会は、市民の熱い議論の中から誕生した。

誰に誘われたか忘れたが、私も会に顔をだす出すようになった。倉野さんとは親子ほど歳は離れていたが、お会いした当初から氏・夫人と妙に馬が合い、忽ち協会派や革マル派との対応での悩み事をストレートに相談

する間柄となった。また「鹿島開発・六カ所村開発問題」など、私的な取材活動上のテーマでも議論できる数少ない大先輩でもあった。倉野さんからはフロントの江戸川人脈を紹介され、金高毅さんをはじめ皆さんの「人間力」に魅かれて同盟に入った。

当時の倉野ご夫妻は、若者たちから「ゲバジ、ゲババ」と尊敬の念を込めた愛称で呼ばれ、お二人のお宅にはいつも誰かがいた。地域で暮らし活動する人達の「溜まり場」的な場所(勝手に思い込んでいただけなのだ)となっていた。倉野家を訪ねる人の多くは? 玄関ではなく脇の木戸から庭先に回り、倉野さんが釣り上げた小鯛の泳ぐ水槽越しに居間の様子をのぞき込む。そして、挨拶もソコソコに座敷へと上がり込むそんなスタイルが定番となっていた。

ゲバジは2階の書斎で、煙草の煙に燻されながら書物や原稿

用紙と格闘していた。ゲババは「マド研」という「女性だけ」の読書会メンバーや、高校生たちとよく話し込んでいた。夫人はいつもキチンと正座し、身を乗り出すような姿勢で熱心に若者たちの声に耳を傾けた。6畳ほどの居間の中心には掘り炬燵兼用のテーブルがあり、8人も座れば部屋はスシ詰め状態となつたが誰かがちゃんとスペースを空けてくれた。壁には、倉野さんが趣味で集めた「ぐい呑み」や「パイプ」がキチンと整理されていくことが懐かしく思い出される(お二人と同居されていたご母堂には、大変ご迷惑をおかけしたことと思う)。私は熱気あふれる「私塾」のような倉野家が大好きで、家主であり「塾頭」でもあった倉野ご夫妻に密かにあこがれていた。

#### 忘れられない釣行

当時、柏市の人口は約15万

人。この原稿を書きながらべ兵連、反戦青年委員会、「柏・現代を考える会」等々仲間の顔を次々と浮かんでくる。若者を中心に次々と生まれた多様な運動を、倉野さんたち地域の「大人達」が世代を超えて見守り支えてくれた。倉野ご夫妻は、時に暴走する若者たちを少し軌道修正しながらも応援してくれた。同盟八中総の対応でも、私や地域の同志の相談にに応じていた。

私はその後、職や活動の場を茨城鹿島、東京へと移し結婚し数度の転居を重ねた。そして終の棲家を現在の秋田に定め転居し34年となってしまった。倉野ご夫妻には活動上のご指導・仕事上のアドバイスだけでなく、家族ともども大変お世話になった。釣り好きだった息子を可愛がっていたご夫妻と4人で幾度となく湘沼・土浦・利根川方面へと釣行したことが忘れ

られない。

2008年4月に富美子さんが享年85歳で突然亡くなられ、追いかけるように同年5月、倉野精三さんも享年84歳でアツと言う間に亡くなられてしまった。ご夫妻を秋田の我が家にお招きし温泉宿で食事をした折に、「次は倉野さんの故郷、尾道で一盃やりましょう」とお約束したことが果たせず悔やまれる。

昨春、胃癌の手術を受けリハビリで体調を崩し、「終活」を強く意識するようになった。おまけに緑内障まで患いパソコン操作もままならず、この原稿もナント半年がかりだった。コロナが収束し落ち着いたら、千葉県東葛地域で反戦の旗を立て70年代を共に駆け抜けた「倉野塾」の仲間達と共に、倉野ご夫妻をはじめ他界された皆さんのご冥福を改めてお祈りしたいと強く思っている。

### 『先駆』9月号を読んで

『先駆』を読んで」の寄稿は2度目となる。仕事を離れたこともあり、働き暮らし生きてきた自身の歩みと先駆誌面の近さ・遠さを確かめたい。今号では、「働く・仕事する」ことから掲載論考を取り上げる。

〈企画 エssenシャルワークの現場から〉神戸ケアセンターは事業所設立と同時に労働組合をつくったという。自身、最後の仕事として高齢者協同組合の設立と介護事業に取り組んだ。働く者自身による「出資・経営・労働」の三位一体という理念に期待した。この秋、ようやく労働者協同組合法が施行される。「経営」は、「組合員の意見が適切に反映される」となった。私の関わった高齢協でも、職階・職種別賃金体系が

あった。神戸ケアセンターではどうか。働く者自身が「社会的に必要な仕事(事業)」を自ら創り出すなかで、ゼロから賃金体系を考えることに期待している。日本ではILO「同一価値労働同一基準(負担・知識・責任・労働環境)」も同一企業内ですら空洞化し、まして正規・非正規身分賃金格差は厳然としている。「仕事成果物」は協働の作業の集約という点からは、ILO基準による賃金格差にも納得がいかない。一つの事業(仕事)は成果物を得る作業者の労働の集約による。成果物配分基準は労働時間以外には見いだせない

と、私は考えるのだが…。  
〈論潮2022 外国人「特定技能実習生…」私自身は日本の労働現場は正規・非正規「身

分制」と見ている。雑誌「Wedge」特集テーマ「日本を指す外国人労働者 これ以上便利使いするな」は、さらに「特定技能実習生」という労働身分を示しているようだ。

以上「働く・仕事する」をキーワードとして本号への所感。尚、最近手にしこれらの手掛かりとして注目しているのが、年3回刊「POSSE」。最新号は51号。特集が二つ、①労働運動は「ジョブ型」とどう向き合うべきか? ②ジエネレーション・レフト宣言。代表今野晴貴氏は1983年生まれ、次の時代を担うこのような人々の感性に注目している。私たちの世代がなしえなかつた何がしかを繋げないだろうか。

(板倉幸一)